



研究の最前線 子どもの未来を拓く

子どものからだ研究所

総合スポーツ科学研究センターの新機関として、「子どものからだ研究所」が2023年4月に発足しました。

子どものこころやからだに関する現状は、国内外で今や深刻な問題として取り上げられています。本学の重要なミッションの一つであるこのテーマに、

「子どものからだ研究所」は、豊富な研究実績をもとに果敢に取り組んでいきます。同研究所の設立目的や概要、今後の展望を紹介します。



総合スポーツ科学研究センター長
体育学部健康学科

岡本 孝信 教授

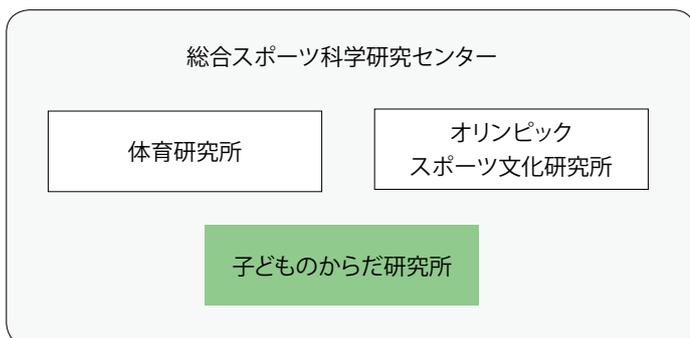
「子どものからだ研究所」から 発信される研究成果に期待

「子どものからだ研究所」は、子どものからだに関する基礎的研究および実践的研究を通じて建学の精神を実現するとともに、その研究成果を広く人類の健康や社会の福祉に貢献することを目的に設立されました。子どものこころやからだに関する諸問題は、日本国内のみならず国際的にも大きな社会問題になっています。これらの問題を解決するために、「子どものからだ研究所」から発信される研究成果に大きな期待が寄せられています。

本学の研究領域は、体育・スポーツ科学を中心に多岐に渡ります。総合スポーツ科学研究センターは、それらの研究を推進し支援する重要な役割を果たしています。総合スポーツ科学研究センター設立以来、ここ10年程度で本学の研究レベルは国内に留まらず、国外に対しても数多くの研究成果が発表されるようになり飛躍的に発展してまいりました。今後は本学の根幹である競技力向上と同時に、研究力を向上させることが本学のさらなる発展において重要です。

総合スポーツ科学研究センターには、「体育研究所」、「オリンピックスポーツ文化研究所」、そしてこの度新設されました「子どものからだ研究所」の3研究所が設置され、それぞれがオリジナリティに富んだ研究を推進しています。「子どものからだ研

研究機関図



子どもの声に耳を傾けることは未来を展望すること



子どものからだ研究所 所長
 体育学部健康学科
野井 真吾 教授

「身体に纏わる文化と科学の総合大学」を標榜する本学では、体育・身体活動・スポーツを通じた健康で豊かな社会・人づくりの実現に向けた教育・研究活動に取り組んでいます。中でも、子どものからだに焦点をあてた研究活動は古くから一貫して取り組まれてきたテーマであり、その研究成果を著実に蓄積してきました。また、その成果を日々の教育活動に活かすだけでなく、広く社会に発信する活動にも努めてきました。正に、本学に課せられた社会的要請に応えるべく推進してきた研究活動といえます。

しかしながら、世間を見渡すと、自殺いじめ、不登校・保健室登校、暴力、虐待、体罰、学級崩壊、貧困・格差等々、子どもをめぐる問題が山積しています。また、健康問題に目を向けても、からだのおかしさ、運動能力低下、身体活動不足、アレルギー、睡眠問題、視力低下、インターネット依存、うつ傾向等々、解決しなければならぬ課題がたくさんです。加えて、国連子どもの権利委員会から示された「日本政府第4・5回統合報告書に関する最終所見」(CRC/C/JPN/CO/4.5)では、「社

会の競争的な性格により子ども時代と発達障害が害されることなく、子どもがその子ども時代を享受することを確保するための措置を取る」と(パラグラフ20)や「(前略)本委員会は、十分かつ持続的な資源を伴った遊びと余暇に関する政策を策定、実施すること、および、余暇と自由な遊びに十分な時間を割り振ることを含め、休息と余暇に関する子どもの権利、および、子どもの年齢にふさわしい遊びとリクリエーション活動を行う子どもの権利を確保するための努力を強化すること」(パラグラフ41)が勧告されている現実もあります。これらの事実、子どものからだに関する研究のさらなる進展の必要性を物語っています。

そもそも、子どもは未来そのものです。また、子どもを想わないおとなはいません。少なくともそう想いたいものです。そのため、子どもの声に耳を傾けることは未来を展望することにも通じます。ところが、前述の最終所見には、「(前略)本委員会は、子どもに影響を与えるすべての事柄において自由に意見を表明する子どもの権利が尊重されていないことを、依然として深く懸念している」(パラグラフ21)との勧告も示されています。その点、子どもたちは自らのからだを犠牲にして、SOSともいえるような種々の「声」を発してくれています。だとすれば、そのような「声」に注目し、声にならない「声」、言葉にしにくい「声」にも想いを馳せつつ、子どもの「声」を聴く必要があります。

このようなことから、「身体に纏わる文化と科学の総合大学」として、子どものからだに関する研究を一層推進し、その成果を広く社会に還元することを目的に、本年(2023年)4月に設立されたのが本研究所というわけです。そして、当面は「子どものからだの実態に関する研究(実態研究グループ)」、「子どものからだを育む実践に関する研究(実践研究グループ)」、「子どもに関わるおとな支援に関する研究(支



援研究グループ)の3つのプロジェクトを掲げて種々の研究を推進していきたいと考えています。兼任所員には、子どもを取り巻く各研究分野の専門家が名前を連ねてくれています。今後の研究成果にご期待ください。また、本年10月9日(スポーツの日)には本研究所の設立記念シンポジウムも企画しています。きっかけは、本研究所の設立を耳にした学外の研究者からの問い合わせで

した。とにもかくにも、研究活動をスタートさせないことには研究所の星をなしません。そのため、その船出に精力を傾けていた矢先でした。ただ、そのようなお問い合せをいただき、学内外のみなさんに本研究所の設立を広く知ってもらう必要性に気づきました。また、本研究所への期待の大きさも感じました。そのため、「設立記念シンポジウム」も企画してみたというわけです。

シンポジウム当日は、本学における子どものからだ研究の過去、現在、未来の展望、各プロジェクトの紹介をさせていただこうと思っております。それだけでなく、日本における子どものからだ研究を長年に亘って牽引してきた小澤治夫先生(静岡産業大学 特別教授・筑波大学附属駒場中・高等学校 教授、北海道教育大学釧路 教授、東海大学 教授、静岡産業大学 副学長等を歴任)には、「子どものからだ研究と日体大への期待」と題する記念講演をお引き受けいただくこともできました。学内外を問わず、どなたでも参加できます。また、一人でも多くの方々と子どものからだについて議論できればと思っております。どうぞ、奮ってご参集ください。いづれにしても、産声を上げたばかりの「子どものからだ研究所」ですが、今後は学内外、国内外から子どものからだ研究のメッカといわれる研究所に成長するよう、一歩ずつ着実に子どものための研究を進めていきたいと思います。どうぞよろしくお祈りします。